

## ● 事例 ●

# 高校における特別支援教育の取組と大学等への期待

山口 比呂美

(滋賀県立日野高等学校 特別支援教育コーディネーター)

特別支援教育に本格的に携わるようになってから早六年目になる。携わる前までは「特別支援教育」や「発達障がい」という言葉すら知らない状況で、子どもたちに対しても自分の無理解から、今考えたと反省をすべき指導や支援等をしていたと思う。今さらながら、なぜもっと早くから特別支援教育や発達障がい支援の観点から子どもたちの状況を考えて、ひとりひとりのニーズに合った指導・支援ができなかったのか悔やまれてならない。特別支援教育に携わるようになった当初、ある研修会で講師の先生が「特別支援教育は特別な教育ではなく、『教育の原点』としてとらえて取組を進めていくべきである。目の前にいるひと

りひとりの子どもたちのことを考え、今何が必要なのかを考えて指導・支援をしていくことが大切である。」と話をされたことが印象深く、この話がこれまでの取組の基本になっている。

子どもたちにわからないことがあれば、指導法や教材等を工夫してわかるように指導・支援するのは教える者(教師)の責務であり、当たり前のことである。しかし、現在は多忙化を理由に、この当たり前ことがなかなかできない状況になっているのが残念である。未来ある子どもたちひとりひとりが社会で輝けるように、教育に携わる者(教師)がもう一度「教育の原点」を考えて、指導・支援して

いくことが大切だと考える。大学においても、研究機関という面だけでなく教育機関でもあるので、目の前にいる学生たちのために何をすべきかを考えていただきたいと願っている。これから述べる「高校での取組」や「大学等への期待」についてを参考に、前向きに取組を進めていただければ幸いである。

## 一 高校での取組

高校において特別支援教育の取組が本格的に始まったのは平成十九年度からである。学校での推進役である特別支援教育コーディネーターの先生方は、「理解啓発」、「実態把握」、「校内委員会」、「個別の指導計画の作成」、個別の教育支援計画の作成、「保護者との連携」、「関係機関との連携」など多くの役割が任せられ、担当されている先生方は日々奮闘されている。なかには「何からどのように始めれば良いのか」と、日々悩まれている先生方も多くいると思う。私が勤務している学校の特別支援教育の幕開けは平成十七年度であった。県より「特別支援教育体制推進事業」の指定を受け、何も知らない状況のなか目の前にいる子どもたち（生徒たち）のために、とにかく少しでも前に進ん

でいくことが大切だと考えて取組を始めた。そして、平成十八年度は十七年度同様の指定、平成十九年、二十年度は文部科学省 高等学校における発達障害支援モデル事業の指定、平成二十一年度からは文部科学省教育研究開発学校の指定を受け、現在では高校のなかでは先駆的に特別支援教育、発達障害支援に取り組んでいる。本校の特別支援教育のスタンスは「どの子にもわかる指導・支援」である。

特別支援教育を「特別な教育」と捉えるのではなく、「発達障がいのある子もいない子も、どの子もすべての生徒が本校の生徒だから、どの子に対してもひとりひとり丁寧に指導・支援していくことが大切である。」との観点から「力まないで、これまで通り、ひとりひとりの生徒を大切にわかるように指導・支援していこう。」という姿勢で、現在も前向きな取組を進めている。

しかし、取組を始めた当初は、私を含めてほとんどの職員が「特別支援教育って何？」という状況で、「○（ゼロ）からのスタート」であった。そのため、まずは職員への啓発・研修から始め、「知る、学ぶ」から「理解する」・「理解の深化」へとつながるように進めていった。「知る、学ぶ」では、啓発紙の発行や研修会の開催、目の前にいる生徒たちの状況を知ってもらうための全職員による実態把握調査

などを行った。「理解する」では、個々の生徒や保護者との面談等からわかってきた心情や背景、発達過程での状況などを、毎会議ごとに研修や情報提供という形で理解してもらえらるるよう工夫した。そして、「理解する」から自然に行われるようになってきた具体的な指導・支援を通して、より適切な指導・支援に向けた「理解の深化」へとつながっていった。このような取組を進めていくなかで、生徒の状況を詳しく観察して早期に対応できる体制ができたり、また、「板書の色チョークのみを写す、板書事項のプリント、クイズ形式の発問」など、授業での工夫も行われるようになった。さらに、「担任と保護者との連絡帳交換」、「教科の課題等をやり遂げさせる課外指導」、「スクールカウンセラーとの連携」、「保護者との定期的な面談」、「生徒との日常面談」などの個別的な取り組みへと広がっていった。また、発達障がいのある生徒（以下、可能性を含む）の課題事象（パニック等）が起こった際には、職員が落ち着いて対応し、連携体制も自然な形で関係職員から全職員へとスムーズな対応ができるようになってきた。

そして、このような取組が進むにつれて本校では、在籍する発達障がいの生徒を含めた全ての生徒に効果的な支援ができるように取組を進めると同時に、「高等学校におけ

る特別支援教育」の方策を模索し、次の五つの事項に重点をおいた取組を進めるようになった。

- (一) 特別支援教育に対する職員の理解をより一層深めるための啓発・研修
- (二) 在籍する発達障がいの生徒に対する効果的な授業方法や指導方法・評価等の研究
- (三) 一般の生徒や保護者等に対して特別支援教育への理解を深めるための啓発
- (四) 関係機関等との連携強化
- (五) 在籍する発達障がいの生徒に対する就労支援の方策の研究

また、最近ではこのなかでも「授業改善」と「進路指導（就労支援）」を重視した取組を進めている。「授業改善」については教師としては生徒への指導の原点であり、授業改善週間等の取組や研修会などを通じて、「どの子にもわかる授業」の取組を行っている。一方、「進路指導（就労支援）」については、生徒の将来にかかわることであるので、高校在学中に就労体験や職業に係るボランティア体験、早期からの進路決定に関する個別的な指導などの進路（就労）に向けた指導・支援を行い、生徒たちの将来の社会自立に向けて取り組んでいる。生徒ひとりひとりが「きちんと生

活していける力（生きる力）」を身に付けて、将来、社会自立していけるように指導・支援することが高等学校に課せられた役割であり大変重要なことだと考えて取組を進めている。

## 二 大学等への期待

本校では、進路指導面においても基本的には、発達障がいの有無のみにとらわれることなく、ひとりひとりの生徒に合った適切な進路先を見つけられるような指導・支援を心がけ、生徒の進路希望が実現できることを第一に考えた指導・支援をしている。現在、高校卒業後の進学の割合が七〇%を越え、大学への進学率が五〇%を越えるようになり、本校も全国の傾向と同じように進学希望者の割合が増えている。発達障がいのある生徒のなかにも進学を希望する生徒がおり、生徒の希望実現に向けて高校在学中にできる指導・支援等に取り組んでいる。発達障がいのある生徒は特性はあるものの、なかには優れた能力や技能等をもっている生徒がおり、その力を伸ばしてやって将来の社会自立につながるためには大学等への進学が必要になる場合もある。本校では、大学等へ進学を希望した場合には、本人の

希望を第一に考えて、早期からの情報提供や、補習等を行うなかで、本人に合った進路実現ができるようにサポートしている。また、進学決定後には本人・保護者と進学にあたっての対応について面談を行い、了解が得られた場合には進学先への引き継ぎなどを行っている。

発達障がいに対して自己認識をしている生徒や保護者と引き継ぎについての話をすると、高校までと同じように大学等でも指導・支援が受けられるか否かを心配されることが多い。本人や保護者は「高校を卒業したのだから、できるだけ自立していかなければならない。大学等では周りと同じようにしていきたいけれど：：」、「高校までと同じような指導・支援は求めていないけれど：：」などの話を最初はされる。しかし、よく話を聞いていくと「大学等に引き継ぎをして特性を理解してほしいと思っっている。高校と同じようにはいかなと思うけれど大学等でもできることはきちんとしてほしい。」と話されることが多い。そして、面談のなかで生徒や保護者から引き継いでほしいという事項で多いのは、①困った時に相談できる担当者（場所）を決めておいてほしい。②特性について、すべての職員・先生に知っておいてほしい。そして、必要な時には適切な支援等をしてほしい。③大学等に入学したのだけ

ら、社会自立に向けてできるだけ自分でできるようにしていきたいので、見守りながら必要な時に支援等をしてほしい。などである。このような希望を考えると、適切な支援等が必要としながらも社会自立に向けての意欲や自立心が感じられる。このような希望事項のなかには、大学等においては実現が難しいこともあると思うが、可能なかぎり前向きに取り組んでほしいと思う。

さて、高校から大学等への引き継ぎにあたっては、最近では徐々に特別支援教育や発達障がい支援に取り組んでおられる大学等もあるが、なかには「専門の先生はいるのですが、大学としての取組はまだできていない。」というところもある。また、「まだこれから」というところもあり、時には大学等の担当者に「知ってもらい、理解してもらい、ことから始めなければならないこともある。しかし、多くの大学等では引き継ぎを行うことをきっかけにして、「このように正式に引き継ぎを受けた以上、これから体制づくりをしていきたい。」という協力的な姿勢になっていただけている。高校としても、本人の社会的な自立に向けて生涯にわたる支援等の観点を考えて、卒業すればそれで終わりではなく、卒業後の本人へのフォローを行いながら、大学等との連携を図りながら援助していくことが大切だと考

えているので、今後も前向きに協力をしていただけることを願っている。

ある医療機関の先生から「高校は三年間だけ。三年間だけ見ないふりをしたり辛抱することで、何もしくなくても済んでしまうこともある。しかし、困っている本人は一生である。三年間だけのことを考えずに『生涯にわたる支援』という観点から指導・支援の方法を考えてほしい。」と助言を受けたことがある。高校はたった三年間ではあるが、三年間の間に本人の社会自立に向けて少しでもできることがあると考えて日々取り組んでいる。大学等も同じではないだろうか。「何かをしなければならぬ」ではなく、「本人のために今、何が必要なかを考えた指導・支援」を大切にしたいと願っている。個々の発達過程において、その時に本人と向き合っている者（機関）が、その時に必要としている指導・支援、協力等を行い、将来の社会自立に向けた生涯を見通した支援等を行っていくことが重要ではないだろうか。

### 三 おわりに

特別支援教育に取り組んでいるなかで最も重要なこと

## 特集・発達障害

は、「将来、自立した時にきちんと生活していける力」を身に付けさせることだと考えている。そのためには、発達障がいのある生徒については本人や家族がきちんとした障がい認知をして、その特性を自分自身が理解し、周囲にきちんと伝えることができ、周囲の理解を得たうえできちんとした支援を受けられるような力を身につけさせられるように指導・支援をしていくことが大切だと思っている。

本校が特別支援教育に取組はじめて、本年度六年になるが、今も暗中模索の状態である。取組はじめた頃は、とにかく「知る、理解」が中心で無我夢中であった。しかし、取組が進み職員の理解が進んでくると、次々と新たな課題が出てきている。今は、その課題をどのように解決していくのかを考えて、日々の取組を進めている。そして、それが本校の特別支援教育が進んできている証拠となっている。最後に、本校で最近話していることを紹介しておきたい。それは、「発達障がい」や「特別支援教育」という言葉が、いずれ（将来）はなくなり、社会のみんながそれぞれの特性や個性と受けとめ、個々（それぞれ）をお互いが認め合い、手をとりあって生きていける社会にすることが大切ではないかということである。日野高校の特別支援教育のスタンスは「どの子にもわかる指導・支援」である。発達障

がいがあるなしにかかわらず、すべての子どもたち（人たち）が瞳を輝かせ、いきいきと生活できる社会になることを願い、微力ながらも前向きに取組を進めている。